宇土櫓（うとやぐら）

平左衛門丸（へいざえもんまる）の北西隅に位置する宇土櫓は、熊本城で唯一残る五階櫓（ごかいやぐら）です。五階櫓の南には平屋建ての続櫓（つづきやぐら）が連結しており、いずれも国の重要文化財に指定されている大変貴重な建物です。平成28年熊本地震の被害を受けた宇土櫓は一度建物を解体し、令和14年度（2032年度）の復旧完了に向けて修復を進めています。

被災前の宇土櫓

名称の由来

17世紀の記録には「御天守西ノ御丸五階御矢蔵」と記されます。その後、18世紀中ごろまでには「宇土櫓」と呼ばれるようになりました。宇土櫓には宇土城天守を移築したという伝承もありますが、現在は否定されています。この周辺には宇土櫓のほかにも「宇土類族方（るいぞくかた）」と名がつく櫓があったことから、小西行長（こにしゆきなが）の旧家臣をこの一帯に一時収容したことが名称の由来とも言われています。

基礎情報

三重五階・地下一階、続櫓一重（一部二階）

高さ（石垣上端から）約19m

建物の特徴

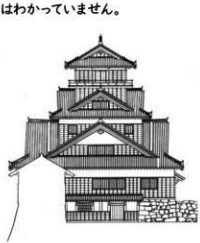
宇土櫓最上階の外側には、手すり（高欄（こうらん））を付けた板敷の縁（廻縁（まわりえん））があります。また、天守と同じように大きな三角形の破風（はふ）（千鳥破風（ちどり）・入母屋破風（いりもや））を四面に配置していますが、反りはなく直線的です。

鯱（しゃち）について

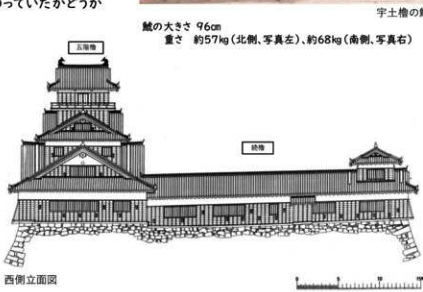
現在の宇土櫓に使用されている青銅製の鯱は、昭和2年（1927年）の修理時に、当時熊本城を管理していた第六師団司令部に保管されていたものをのせたものです。明治4年（1871年）に撮影された写真で鯱は確認できませんが、江戸時代の絵図の一部には鯱を描いたものもあり、すべての時期で鯱がのっていたかどうかはわかっていません。

宇土櫓の鯱

鯱の大きさ 96cm
重さ 約57kg（北側、写真左）、約68kg（南側、写真右）



南側立面図



西側立面図

平成28年熊本地震の被害

平成28年（2016年）4月16日の本震で、南側に連続する続櫓は倒壊しました。五階櫓は倒壊を免れたものの、一部の壁が剥落し、建物にゆがみが生じました。また、石垣にも緩みや膨らみが生じています。倒壊した続櫓はすでに部材を回収し、保存しています。

被災後の宇土櫓

解体保存工事

宇土櫓は、最上層である3層目から瓦・土壁・床板の順に解体していき、次の2層目・1層目へと進み、最後に軸組（じくぐみ）を解体します。解体時にはどこの部材であるか分かるように番号を付けて丁寧に解体し、復旧の際の資料とするために部材の寸法・形状・時代区分・破損状況などの記録をとっていきます。

解体が進む3層目

素屋根とは

建物を覆うように屋根をかけることで雨から守り、木材や壁などを濡らさないように作業するための仮設建物です。宇土櫓の素屋根（すやね）は堀底からの高さ約44m、延床面積は4238㎡あります。素屋根の内部では、櫓の解体を進めながら部材の調査を行ったり、解体した部材を保管したりします。

南西から見た宇土櫓素屋根

今後のスケジュール

現在、五階櫓の解体保存を実施しています。解体後はおよそ2年かけて復旧設計、その後5年かけて櫓の復旧を行い、令和14年度（2032年度）の復旧完了を目指しています。

熊本城調査研究センター